



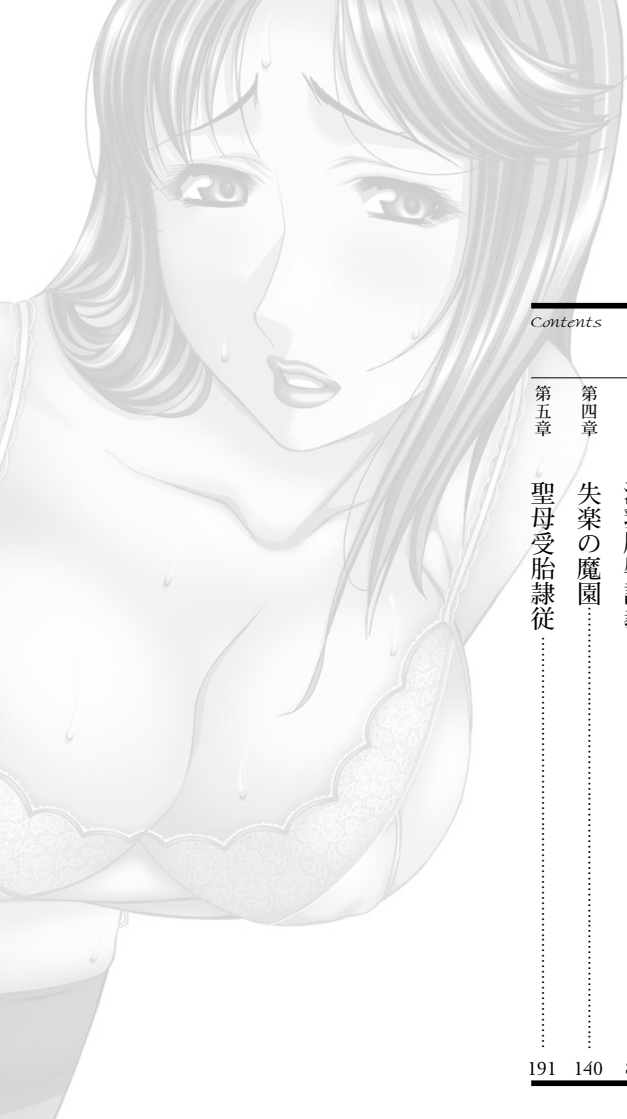
牝妻蜜獾倶楽部

夏美と涼子

筑摩十幸

挿絵／旅人和弘

リアルドリーム文庫／PDF立ち読み版



Contents

目次

第一章	蜜楽への誘い……………	4
第二章	囚われた牝豹……………	37
第三章	淫乳屈辱調教……………	88
第四章	失楽の魔園……………	140
第五章	聖母受胎隷従……………	191

登場人物

Characters

倉木 夏美 (くらき なつみ)

マンション「ノーブル・天宮」に住み、近所からも人気を集める人妻。夫との間に一歳の娘を持つ、二十九歳。

鈴原 涼子 (すずはら りょうこ)

新婚生活二ヶ月目の若々しい主婦。二十五歳。夏美とは友人関係にある。

三沢 泰作 (みさわ たいさく)

夏美の夫が務める会社の部長で好色な中年男性。彼女のかつての上司でもある。

佐藤 (さとう)

秘密クラブを運営する色事師。三沢の依頼で彼の計画に荷担する男。

飯尾 充 (いいお みつる)

スポーツクラブでアルバイト中の大学生。テニスのコーチとして涼子と夏美に慕われる。



(あなた……ごめんなさい……涼子さんのためなの……それにこんな卑劣な男たち、絶対に許せないわ)

ただ理由はどうあれ、これは夫に対する裏切り行為に違いない。罪悪感で胸がナイフで抉られたようにキリキリと痛む。そして卑劣な男たちの言いなりにならなければならぬと思うと、ハラワタが千切れそうなほど悔しさがこみ上げる。

「ククク。本当にその身体を差し出すんだな」

「ほ、本当です。でも、こつちにも条件があるわ」

気丈にもケダモノのような男たちの目をまっすぐ見つめる。絶体絶命の状況にあっても、美しい人妻の崇高な精神は完全に屈服することを拒んでいた。

「三沢さんにだけ……なら……だ、抱かれます。他の人は絶対に嫌です」

「なんだと!? お前、自分の立場が……」

提案を受けて佐藤は気色ばんだ。極上の獲物を前にして大人しく引き下がるような男ではないし、何より獲物であるはずの夏美に仕切られるのが癪に障るらしい。

「まあ、待て。ここは私に任せてくれないか」

三沢の声は重く威厳に満ち、相手に有無を言わせない響きがあった。一見パツとしない風貌の中年男だが、いざというときに見せる態度は貫禄がある。

「ちつ、三沢さんが言うなら仕方ねえ。お楽しみはとっておくか」

「洪々と言った様子で佐藤は了承した。その様子からやはり三沢がリーダー格なのだと夏美は推察する。」

（この男さえなんとかすれば……）

幸い一対一という状況はできつつある。隙を見つければ脱出も可能かもしれない。夏美は密かに視線を巡らし、ドアや窓の位置、いざというときの武器になりそうなモノなどを探り出す。

「夏美君の度胸と友情に免じて、契約成立というこう」

三沢が合図すると佐藤が夏美の腕の中で眠っているヒカルに手を伸ばす。

「娘に何をしますか?! 汚い手で娘に触らないでっ」

「ちよつと預かるだけだ。娘の前で犯されたいのかよ」

「でも……」

「ごめんなさい、夏美さん」

佐藤に代わって涼子が手を伸ばしてきた。

「ヒカルちゃんの面倒は私がちゃんと見ますから」

そう言って申し訳なさそうに頭を下げる。見ず知らずの男よりは、涼子のほうが遙かに信頼できる。とは言え、娘を人質にされた状況に変わりはない。

「お願いするわ……涼子さん」

娘の額に軽く口づけをして見送る。まるで今生の別れのように切なくなつたが唇を噛み締めて我慢する。その間に涼子はヒカルを抱いて部屋から出ていき、佐藤もそれに続いた。

「では、始めようか。まずは裸になつてもらおう」

ふんぞり返つたかつての上司が高飛車に命令する。

「こ、ここで……」

真つ昼間のリビングルームで裸になるなど、信じられない命令だ。だが今、親友も娘も敵の手にある。下手に逆らうわけにはいかなかつた。

「わかりました」

意を決して夏美は立ち上がり、ブラウスのボタンに手をかける。緊張で指が震えたが、動揺を悟られたくなかつた。フウツと大きく息を吐き思いきつてボタンを外していく。

「く……」

男のいやらしい視線が胸元に集中するのがわかる。羞恥と緊張で心拍数が跳ね上がり、イヤな汗が背中をじっとり濡らすのがわかつた。

「早くしろよ、夏美君」

不躰なヤジに腹が立つが今はグツとこらえる。白い肩を抜け出させ、ブラウスを背

中のラインに沿って滑り落としていく。脱ぎ捨てられたシャツブラウスがパサリと足元に落ち、白いシルクのブラジャーに包まれた豊乳が完全に露わになった。

乳肌はミルクを溶かし込んだように白く、柔らかそうな乳肉は大きめサイズのブラカップからもこぼれ落ちそうなボリュームだ。

まさに女の象徴といった感じで、うっすらと汗を光らせる胸の谷間からは濃厚なフェロモンが漂い、ヴァギナへの妄想を掻き立てずにはおかない。

「すごいな。涼子よりでかいじゃないか。さすが子供を産んだだけのことはある」
感心したように歓声を上げつつも、三沢はジッと正面から視線を注いだまま動かない。網膜に夏美の胸を焼きつけようとするかのように、瞬き一つしない。

(こ……こんな男に……)

かつて三沢に襲われかけたとき、警察にでも訴えるべきだったと後悔したが後の祭りだ。今は涼子や娘のためにも耐えなければ。

しばらく迷った後、夏美はスカートのホックに手をかける。脛を閉ざして三沢の存在を意識から追い出し一気にホックを外した。脚線を舐めるようにしてスカートが滑り、すぐに足元に落ちる。

清潔な白ショーツはレースに縁取られた上品なシルク製。普通サイズのショーツだが、テニスで鍛えている夏美のヒップは平均以上に盛り上がっており、相対的にシヨ

ーッがマイクロピキニのように小さく見えてしまう。普通にしているも生地が食い込んできて、半ばTバックに近い状態だ。

「パンティも白か。これからはもつと派手なのを穿いてくるんだぞ。それにしてもムチムチの尻だな。責め甲斐がありそうだ」

「うう……」

下着姿を鑑賞され、あまりの恥ずかしさに腰がへつぱり腰に折れてしまう。夫以外に肌を晒したことはなく、緊張で膝も震えて、今にも座り込んでしまいそうだ。

「まずはパンティから頼むよ、夏美君。オッパイは最後のお楽しみだ」

胸フェチらしい三沢の発言を受けて、夏美はパンティの両側に指を差し込む。ぴっちり貼りついたシルクの生地を下に向かって引き下ろす。心臓の鼓動がどんどん速くなつて全身の血流が沸騰する。なだらかな下腹やお尻のワレメが少しずつ露出し始めていた。

(ああ……あなた……)

三沢が食い入るようにしてのぞき込んでくる。その視線が肌に突き刺さると、夫に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「もつと色っぽく尻を振りながら脱ぐんだ。ストリッパのつもりでな」

猥褻な言葉を浴びせられ、怒りと恥ずかしさで頭の芯がカッと熱くなる。人質さえ

いなければ今すぐにでも張り飛ばしてやりたい。

(なんて惨めなの……でも、今は我慢よ……夏美)

内心自分に言い聞かせ、萎えそうな気持ちを奮い立たせる。最後の最後まで諦めなければ、いつか相手は隙を見せるはずだ。

「うう……そんなに見ないで……」

ムッチリ官能的な尻肉を左右にくねらせながら、夏美はパンティを太腿まで押し下げた。下着は小さく丸まって急速に面積を縮小し、隠す機能を放棄してしまう。そこから滑らかな太腿に沿って、ゆっくりパンティを降ろしていく。

少しでも男の視線を遮ろうとすると、自然に内股でお尻を突き出すような格好になってしまっていた。うつむき加減の姿勢のせいで双乳も重そうに下向きにタプンとぶら下がる。そんな風に恥ずかしそうに身をくねらせる仕草が、かえって人妻の色気を強調してしまう。やがて女っぽいふくらはぎから急激に細くなっている足首を抜け、パンティは爪先から抜き取られた。

「ほう、綺麗な生え方だが意外と濃い感じだな」

三沢の言葉通り、夏美の陰毛は涼子よりも密度が濃い。黒く艶々した縮れ毛が炎の形に恥丘を覆って、ふっさりと盛り上がっている。恥丘の張り出しも大きいほうだろう。お尻もテニスで鍛えているせいか、二十代前半といっても通用するくらい張りが

あり、少しも垂れていない。そのくせ人妻らしくムッチリと熟れており、完熟の魅力に満ち溢れている。

その上のウエストはコルセットで絞ったかのように鋭い角度でくびれており、胸やお尻とのギャップを見るとまるで蜂の腰である。着やせするタイプだったのか、普段は上品でお淑やかな夏美にしては想像を遙かに超える、色気たっぷりの魅惑のボディだと言えた。

「予想を超える素晴らしい身体だ。いよいよ、最後はブラジャーだ」

期待を込めた熱視線が肌を焙る。男の変質性を改めて実感し、夏美はゾクツとうなじを鳥肌立たせた。

「こ、こんなことさせて喜ぶなんて、あなたは汚らわしい変態よ」

強気の言葉で牽制しながらも、見つめられる恥ずかしさに胸と股間を隠したままモジモジと腰をくねらせる。鼓動が速くなり腋の下には嫌な汗が滲み出す。しかしここで止めるわけにはいかない。夏美は一回深呼吸してから、背中のホックへ手を伸ばした。そうすると股間を隠すことができなくなり、少しでも見られる範囲を減らそうと、夏美は太腿を必死に摺り合わせた。そんな羞恥のポーズも、男の昂奮を誘ってしまうのだが。

「うう……」

先ほどよりも緊張の度合いが高く、指先まで震えた。見えないせいもあって、なかなか外れてくれない。

「グズグズするな。早くしないと涼子が犯されるぞ」

「だ、だめ……それだけは……きやあつ！」

唐突にホックが外れて、ブラが弾けるように脱げてしまった。慌てて覆い隠す腕の間から、溢れるように乳白色の乳肉がはみ出してくる。

「こら、隠すんじゃない。気をつけだ」

三沢が語気を強めて命令すると、夏美はオズオズと両手を脇に添え、身体を直立させた。ついに夏美の乳房がその全貌を現す。

オオオツとさすがの三沢も感嘆の声を上げた。

下はみぞおちの辺りまでたつぷりの量感で盛り上がり、横は身体の幅よりかはみ出している。少し垂れ気味なラインも大迫力のポリュームを伝えて、かえって魅力アップさせていた。ブラに収まっていたときからかなりの大きさだったが、下着の圧迫から解放された今、ポリュームが二割ほど増して見えた。

「うう……見ないで……」

自分では大きすぎて劣等感を感じている乳房だ。そこを身体のどこよりも熱心に見つめられ羞恥心が燃え上がる。ある意味聖域を見られるよりも恥ずかしいと言えた。

下乳の発達に伴って頂点はやや開き気味に上を向いている。乳輪は少し濃いめのピンク色で、サイズは直径四センチほど。ニップルも親指ほどの太さだ。

乳房全体のポリウムが大きいため、よく発達した頂部分も決して大きすぎるとは感じられず、むしろ絶妙のバランスと言ってもいいだろう。

そして染み一つない肌の白さも魅力を高めている。まるで母乳をそのまま固めて作ったような乳白色。肌理の細かさも申し分なく、蛍光灯の光をミラーボールのように反射してそれ自体輝いているように見えてしまうほどだ。涼子のDカップも形よく芸術品と呼べるほどの美乳だが、熟れという意味では夏美に及ばない。

「長い間待った甲斐があったな」

三沢が感慨深げに呟く。思えば彼が極度に乳房に執着するようになったのは、夏美にふられてからだだった。そしてその因縁とも言える巨乳をこれから思うがままに責め罵れるのだと思うと、全身を熱い血が駆け巡り、股間は痛いほど勃起してしまう。

「サイズとカップを教えてもらおうかな」

血走った目を皿のようにして巨乳観察を続ける三沢。一体どれほどの数値が聞けるのか。ドラムロールでも聞こえてきそうな期待の高まりであった。

「あ、あ……九十センチ……Fカップ……よ」

夏美が報告すると、三沢は再び唸るような声を上げる。

「すごいオッパイだな。数字を聞いただけで勃起してくるよ」

芸術品を鑑賞する目つきで三沢は視姦を続ける。

「そのくせウエストはくびれているし、尻もムチムチだ。やはりあのとき無理矢理にでも奪うべきだったかな。いや、こうして感動を味わえたのだから、やはりこの年月も無駄ではなかったということか。熟成させてくれた倉木君に御礼をしなければな」

三沢は好き勝手なことを言つて、夏美は耳を塞ぎたい心境だった。夫との愛の年月まで穢されたように怒りが沸々とこみ上げてくる。

「それでは触り心地を確かめてみるか」

三沢が舌なめずりして背後に回り込む。磨いた大理石のように白い背中と流れるような美しい黒髪のコントラストが欲情を掻き立ててくる。

「手を頭の後ろで組むんだ」

「わ、わかったわ……うう……」

胸を強調する羞恥ポーズを強要され、美貌が屈辱に歪む。それでも勇気を振り絞り夏美は両腕を頭の横に上げていく。空気がひやりと腋の下を舐めて、いかに大量の汗をかいていたか改めて実感させられる。その汗に蒸れた腋の下を晒すのだと思うと、また別の恥ずかしさがこみ上げてきた。

（負けてはダメ……こんな卑劣な男に……）

弱気になる自分自身を叱責する夏美。三沢にだけは絶対負けたくないという気持ちがあった。だが緊張は抑えきれず、自然と呼吸が荒くなり、心臓が狂ったように打ち始める。熱い血流が流れ込む脳がゆだつてしまいそう。

「フフフ。これが倉木夏美のオツパイか」

昂奮で声を嗄らしながら、前に回した掌がムンズと双乳を鷲づかみにする。

「ああ……うっ！」

べつとりと汗に濡れた中年男の手が乳房に密着し、あまりの気味悪さにこらえようとした声が漏れてしまった。夫の優しい愛撫とはまったく違う、思いやりの欠片もない無遠慮な触り方は不快でしかない。

（うう……なんて……熱いの……）

これほど熱い手に触れられたことがない。いかに三沢が欲情しているかを肌教えられたようで、嫌悪感がさらに強まる。まるで全身が生殖器官のような男だ。

「おお。こ、これはすごい……これこそ私が求めていた乳だ」

三沢の指が感動のあまり、小刻みに震えていた。

指先に感じる柔らかさ、掌に感じる滑らかさと張り、肩にまで伝わってくる重量感。長年追い求めた夏美の乳房がそこにあった。涼子の乳房も甲乙つけがたいほど素晴らしいが、三沢にとってはやや物足りない。フレッシュな鮮度はあっても、落果寸前の

完熟果実の持つ甘い魅力が足りなかったのである。

「ううむ。やはり子供を産まなければこの味わいは出せないな。まだ乳が出るのかね」

三沢が見せつけるように乳房を持ち上げ、タプンタプンと揺らした。

「ンああつ。で、出ないわ……もう……や、やめて」

「そいつは残念だ。こんなに大きなミルクタンクがもつたらない」

乳房はまるでミルクそのもののように大きく波打ち上下に派手に揺れる。さすがFカップといった感じで、その乳揺れは大迫力。まるで岸に打ち寄せる津波のようだ。

（ああ……こんなに……胸が……）

自分の乳房の巨乳つぷりを改めて知らされ、恥ずかしさが胸いっぱい膨らんでいく。そして感じているのは恥ずかしさだけではない。夏美は非常に感受性の高い乳房の持ち主だった。揉み込まれる乳房から、熱く疼くような感覚が乳脂肪に染み込んでくる。その熱さは着実に蓄積され、乳腺に火がついたように胸が火照ってきた。

「うう……いや……もう触らないです」

胸に感じる熱い疼きを否定するように、夏美は首を振りたくる。だが乳房に異様に執着する三沢が、夏美の反応を見逃すはずがなかった。

「乳首を押し立てて、触るなもないもんだ」

男の言葉通り、人妻の乳首はぷつくりと膨らみ始めている。色も一段と濃くなつて、官能の色気を振りまき出していた。

「ううあ……こ、これは立派な犯罪よ……絶対、ただじゃ済ませないわよ……」

「台詞が違うぞ。もつとおねだりするんだ」

左右のニップルを人差し指と親指が上下から挟み込む。そのまま力が加えられ、残酷なほどに乳頭は変形させられる。

「あああつ、い、痛いっ」

それだけでなくとも繊細な神経の集合体を力任せに潰され、鋭利な痛みが乳房に突き刺さる。しかしそれは単純な痛みではなく、肺腑を灼き、肋を溶かすような魔味も含んでいるのだ。まだ授乳が終わつて間もないだけに、乳房と子宮を繋ぐ回路は健在。太い指にしごかれ、捻られるたび、お腹の底がキューンと熱くなつてくる。

「ホラホラ、教える通りに言うんだよ、夏美君。触つてくださいつてな」

乳首を集中的に責めながら耳元に囁き、屈服を強いる。涼子と同じく夏美も乳が弱点なのだと見抜いていた。

「ハアハア……うう……どうか……わ、私……の……お乳を……ああ……三沢さんの……うう……やっぱり……そんなこと……言えないわ」

恥辱に顔を真っ赤にして唇を噛む。切れ長の瞳はまだまだ反抗の火を灯して煌めき、



(ああ……まさか……薬を……)

気づいたときにはもう遅かった。いまさら吐き出すわけにもいかず、肉体は内側から魔薬にジワジワ蝕まれていく。

「そ、そんな……夏美さんや涼子さんがそんなこと……」

二人の人妻を女神のように崇めていた青年コーチは、目の前で起きていることが信じられないようだ。

「フフフ。若いな、坊や。女だつて性欲はある。特に彼女たちみたいに女の悦びを知った人妻なら尚更だ。彼女たちがテニスで太腿を剥き出しにし、オッパイをブルンブルンさせていたのは欲求不満のサインなんだ。君は気づかなかつたのか」

佐藤は涼子にも口移ししながら、囁き続ける。それは飯尾にというよりも、夏美と涼子に向けられた言葉のような気がした。

「で、でも……お二人は結婚してるのに……不倫なんて……不潔です」

若者特有の潔癖さで飯尾が反論した。その言葉は夏美にとつても耳が痛い。

(私……不倫を楽しんでいる不潔な女だと思われている……)

純な青年に軽蔑されていると思うと胸が痛むと同時に、甘美な疼きが子宮を締めつける。いつそ、そんな女になつてしまえばいいという捨て鉢な気持ちも頭をもたげてくる。

「身体は求めているのに、夫は仕事が忙しくて構ってくれない。それは女にとってとても苦しいことなの」

佐藤の言葉を肯定するように涼子が頷く。

「そんな彼女たちを放置するほうがよっぽど罪深いと思わないか。なあ、奥さん」
「んはあっ！」

ギョッと乳房を握りつぶされ、夏美は喉を反らした。媚薬が効き始めたのだろうか。全身の性感帯が敏感になっており、乳房を揉まれているだけで、意識が飛びそうになる。変化は肉体にも現れ、ニップルは豹柄のプリントを突き破らんばかりにそそり立ち、ピキニシヨーツの底には熱い潤いがじつとりと湧き始めていた。

屋外でしかも顔見知りの青年に見られているという状況が、夏美の中に巣くった淫魔を呼び起こそうとするのか。いつも以上に激しく反応する自分の身体に夏美は狼狽えることしかできない。

「俺は常識という枷を外し、女たちの秘められた欲求を解き放つてやるんだ。見ろこの顔を。本当の悦びを知った女はこんなにも美しくなるんだぜ」

佐藤に顎をつかまれ、美女たちは青年のほうに顔を向けさせられた。夢見るような蕩けた表情は、テニスコートでの颯爽とした美貌とはまったく逆、女の本能剥き出しの淫らさだ。しかしその妖艶な色香に圧倒され、飯尾は反論の言葉を失う。確かに佐

藤の言う通り、夏美も涼子も美しくなっているのだから。

「妻がより美しくなれば旦那も大喜びだ。結婚生活だつてうまく。なあ、涼子」

「はい。わたし、佐藤さんのお陰でとつても幸せです」

「フフフ。わかつたかな。不倫は悪だと常識を振りかざすのは不細工な女だけさ」

無茶苦茶な理屈だが、夏美は反論できないまま。全身を包む心地よい倦怠感に吞まれてしまい、氣力がまつたく湧いてこないのだ。

「まだ信用できないなら、坊やも参加してみたらどうだ。男だつてところを見せてくれよ」

挑発の言葉に飯尾はコクンと頷いた。

夏美と涼子はレジャーシートの上に並んで仰向けになる。両手を頭の上で交差させ、両脚を肩幅くらいに広げるといふかなり無防備な格好だ。

美女二人の全裸よりもセクシーな水着姿を目の当たりにして、飯尾はどうにも落ち着かない。目のやり場に困っている様子だ。

「まずは日焼け止めのローションだな。君は夏美さんのほうを頼むぜ」

佐藤は涼子の身体にローションを振りまいた後、小瓶を青年に投げ渡した。

「僕が……倉木さんに……」

しばらく戸惑っていた青年だが、佐藤が涼子の身体に浅黒い手を這わせるのを見ているうちに気持ちが高ぶってきたようだ。

「倉木さん、僕なんか……いいんですか？」

「ええ……お、お願い……飯尾君……それを……私の身体に塗って……」

何かに急ぎ立てられるように、夏美はコクコクと頷いてしまう。すでに身体の奥に官能の火がつき始めていた。理性を失わないうちにこの淫らな遊戯を終わらせてしまわなければならない。

「じ、じゃあ……いきますよ、夏美さん」

ゴクリと唾を飲み込んだ飯尾がローションを手取る。その桃色の液体を見て夏美は頬を引きつらせた。中身はただの日焼け止めではなく、夏美を苦しめた媚薬入りローションなのだ。すでにカクテルを飲まれた身体は内側から発情しており、さらに責められたらどうなってしまうのかわからない。

（あんなものを塗られたら……）

その恐ろしい効力は身をもつて十分すぎるほど知らされている。だがいまさら断ることもできず、まな板の上の鯉のようにジツと耐えるしかない。

「う……あ……っ」

飯尾の掌がお腹に触れた瞬間、ジュンツと熱い感触が広がってくる。お臍を中心に

円を描くように手を動かされるだけに、激しい官能の高ぶりを感じてしまい、ふしだらな声押し殺すのが精一杯だ。

「ど、どうですか夏美さん」

震える手を動かしながら、青年がおどおどした様子で聞いてくる。まさか自分が媚薬入りのローションを塗り、凌辱の片棒を担がされているとは思ってもよらないのだろう。しかしデルタ地帯や乳房を盗み見る視線には明らかに『牡』としての昂奮が見て取れて、それがまた芽生え始めた露出癖を刺激してくる。

「あ、あ……いい気持ちよ……んんあっ……飯尾君……上手よ」

（私……見られてる……こんな純粋な子に……私の身体を……）

青年の視線を意識すればするほど、しなやかな腹筋を貫通した淫熱が子宮に伝播し、胎内がジーンと疼き出す。自分の肉体が初うぶな青年を昂奮させていることに罪悪感を感じつつも、荒ぶる呼吸に押し上げられ、豊かな双乳をこれ見よがしに揺さぶってしまったのだ。

「もつと全身に塗らないとダメだぜ。こんな風にな」

佐藤は大胆にも涼子の水着の中に直接手を突っ込んで、柔らかな乳房をこね回している。さらにもう一方の手は滑らかな太腿を蹂躞しているではないか。涼子のほうも嫌がるそぶりも見せず、甘えるように鼻を鳴らしながら快感に酔ったような微笑を浮

かべていた。

「あ、あああん……………オッパイ……………気持ちいい……………もっと、塗ってください……………プ、ブラもずらして……………涼子のオッパイにい……………ああうう……………っ」

打ち上げられた人魚のように身をくねらせながら、新妻にあるまじきおねだりをする涼子。すぐ隣で演じられる痴態に息を呑み、飯尾は改めて夏美のほうに向き直った。「な……………夏美さんも……………いいんですね……………」

手にたっぷりとローションをすくい取りながら、確認するように呟く。夏美が小さく頷くと同時に、裾野から乳房全体を持ち上げるように五指が食い込んできた。

「あ、ああっ！ 飯尾君……………っ」

極小のブラはすぐにズレ上がり、乳房はその全貌を露わにする。真っ白な染み一つない乳肌の上にツンと尖ったグミ色の乳頭を見て、飯尾は血走った目を見開いた。

「す、すごい……………夏美さんのオッパイって……………こんなに大きくて柔らかいんだ」

感動めいた声を漏らしながらパン生地を捏ねるような圧迫を加えてくる。ムニユツと指の間から乳肉がはみ出し、意のままに形を変えていく乳房が牡の本能を刺激した。

「あ、ああっ……………そんな……………はげしい……………あ、あふうん」

性体験はあまりないらしく、愛撫と言うにはほど遠い荒々しい玩弄だったが、それがかえって青年の一途さを伝えてきて、夏美の胸を息苦しくさせる。

乳房に染み込む媚薬が乳腺を加熱させ、甘く痺れさせる。それと同時に胸の中に膨らんでくる膨張感。乳腺細胞の一つ一つが目覚めさせられ、沸々と母乳を湧かせ始めたのだ。

（ああ……そんなにされたら……お乳が出ちゃう……っ！）

そんな恥ずかしい姿を見られたくないと思うと同時に、淫らな昂奮とシンクロするように、乳管の中をジワジワとこみ上げてくる熱い搾乳欲求。お乳を吸われない、思いきり搾られたいというふしだらな願望が頭を掠めたりもする。

（ダメ……飯尾君の前でそんなこと……許されないわ）

なんとかこらえようとするものの、いやらしく膨らんだ小鼻から漏れ出る吐息は火のように熱く、乳首も緋色に燃えてどんどん痲ってくる。乳悦が全身に波紋のように広がって、思わず腰がモジモジとくねってしまふ。

「上だけじゃダメだ。下半身にも塗らないとな」

夏美の反応を見極めた佐藤が次へのステップを指示する。その言葉にそそのかされ、飯尾はオズオズと太腿にも手を伸ばしてきた。しなやかな太腿の上を、ローションに濡れた掌が何度も往復する。

「ああ……これが……夏美さんの太腿なんだ……」

いつもテニスコートでスコート越しに眺めることしかできなかった憧れの人妻の太

腿に直接触れることができ、青年は夢見心地であった。熟れた皮下脂肪の柔らかさと鍛えられた筋肉のしなやかさが絶妙のコラボレーションを見せて、まるで国宝級の陶器を磨いているような崇高な気持ちにさせてくれる。

「ハアハア……そ、そんなにされたら……ああ……ああ……」

情熱的に磨き上げられ、神経が研ぎ澄まされていく。官能の静電気が足の付け根に蓄積され、股間がビリビリと痺れてきた。太腿が何かを隠そうとするかのように、強張りながらびったり閉じ合わされる。その拍子にギュッと収縮したヴァギナから極上の甘露が溢れ出し、いつしかビキニの底ははしたない染みが広がり始めていた。

「夏美さん……とても感じやすいんですね」

胸と太腿に触れただけで、生々しいほど激しく反応する人妻を見つめ、飯尾は驚いたように目を見開く。

（ああ……このままじゃ……私、ダメになつてしまう……）

過酷な調教を受けた肉体は初な青年コーチ相手にも見境なく燃え上がつてしまふ。だが飯尾は遠慮しているようで、聖域や乳首など最も感じるところには触れてこない。それがかえつてもどかしく、夏美をさらなる肉欲の底なし沼へ誘おうとするのだ。焦れつたさに頭上の拳が砂を握り締め、何度も痙攣した。「もつと触つて」という言葉が何度も喉から飛び出しそうになる。

「奥さんも盛り上がってきたようだな。こっちはもうできあがつたぜ」

横では佐藤が思いのままに涼子を嬲り尽くしていた。新妻は乳房も秘部も丸出しにされ、全身をローションと汗にぬめらせて、ゼエゼエと喘いでいる。

「ハアハア……佐藤さん……ああンン……くちゅっ……あふうん」

甘く鼻を鳴らしては貪るようなディープキスを繰り返す。瞳はトロンと目尻を下げ、男に媚びるような視線を向けていた。

「涼子さん……」

その表情が何を物語るのか。数えきれない絶頂体験を味わわれた夏美には痛いほどわかる。淫気が伝染したように媚肉がズキンと痛いほど疼き、思わず窄まる太腿が青年の手を挟み込んでしまったのだった。

「涼子の姿を見て二人が驚いているぜ。そろそろ何が欲しいのか言ってみろよ」

クチュクチュと膣孔にローションを塗り込みながら佐藤が迫る。

「ハアハア……佐藤さんのおチンポ……涼子にください……もう我慢できないの」

ついに限界を迎えた涼子がおねだりの言葉を口にしてしまう。言葉だけでなく腰をヒョコヒョコと上下させ、身体全体で浅ましいおねだりを表現していた。

「フフフ、いいぜ」

狙い通りと言った表情でニヤニヤ嗤い、佐藤が涼子の脚を脇に抱き上げる。ずれた

水着のクロッチ部分からのぞくサーモンピンクに剛棒の狙いを定めた。

「まさか……ここで……」

太陽が降り注ぐ白昼の砂浜。一応岩場で隠されているとは言え、すぐそばに何人も
の人がいるのである。その気になればいくらでものぞけてしまうだろう。そんな公の
場所ですツクスするなど、調教を受けた夏美でもショックだった。飯尾など完全に思
考停止と言った感じで、目の前で練り広げられる淫らな光景に口をあんぐり開けて魅
入っている。

「そら、入ったぜ、涼子。どうだ」

「あつ、あああん！ あつ、ああああん！ いい……とつても気持ちいい……ああ
ああ……ズンズン響くのお……ああああおおうう！」

その間にも正常位での結合は完成し、佐藤と涼子は本格的に腰を振り始めた。美し
い夏のビーチとあまりに不似合いな生々しい女のヨガリ声が、波音の合間に響いて砂
に吸い込まれていく。

「涼子さん！ そんな約束が……」

佐藤に抗議しようとしたとき、

「な、夏美さんっ！」

「えッ、きやああつ！」

不意に飯尾にのしかかられ、夏美は驚きの悲鳴を上げた。下から見上げる青年の顔は野獣のように凶暴だ。涼子たちの淫行に感化されてしまったに違いない。

「だ、だめよ。飯尾君、落ち着いて」

「夏美さん！ もう、僕……僕我慢できない！」

片手で夏美の両手首を固めながら、もう一方の手でビキニショーツを引き下ろしにかかる。夏美も鍛えているとは言え、本格的なトッププレイヤーである飯尾の体力にはかなわない。一見華奢に見えた青年だが、腕や胸板などは目を奪われるほど逞しい。あつと言う間に制圧され、M字の開脚に押し広げられてしまう。豹柄ビキニの残骸が太腿にブリッジのようにかかっているのが、一層淫靡だ。

「ハアハア……これが夏美さんのアソコ……夏美さんの……ハアハア……お尻……」
「ああ、あつ！ だめよ、だめっ！ 見ないでえ！」

願いも虚しく青年は眼をギラギラさせて、暴かれた人妻の秘園をのぞき込む。

陽光を受けたヘアは黒曜の輝きを虹色に反射し、ワレメの上端には皮を剥いてぷっくり膨らんだクリトリスがルビーのように輝いている。愛撫と視姦に焙られたラヴィアはぼつてりと充血し、朝露に濡れた花びらのように美しい。開脚姿勢のせいとか、聖域の中心は浅く口を開きサーモンピンクの谷底に、はしたない潤いを滾々と湧かせている。とても子供を産んだとは思えないほど清楚な佇まいである。

憧れのマドンナの秘園を、白昼のビーチで見つめるといふ異常な体験が、生真面目な青年をかつてない昂奮状態に追い上げた。

「テ、テニスのおときも、この身体で、お尻で……僕を誘惑してたんですね！」

燃え盛る劣情を叩きつけるように、青年は夏美のお尻をバシバシとぶつてきた。身体全体がずり上がるほどのフルスイングで、ラケットで打たれたのかと思うほどの衝撃だ。

「ち、ちがうの……ああつくうん！ 私はそんな女じゃ……はああうん！」

たちまちお尻は真っ赤に染まり、ヒリヒリと痛み出す。しかしその痛みや年下の青年にお尻をぶたれているという惨めさが、なぜか夏美の心を揺さぶる。

「オマ○コをこんなに濡らしているクセに。また僕を誘惑する気なんでしょう！
なんて不道徳で、なんて悪い女性なんだ」

怒りとも昂奮ともつかない衝動に突き動かされ、強烈な一撃がバシーンツと臀丘に叩きつけられた。

「ああ——ツ」

絶叫すると同時に肛門括約筋が収縮する。それに連動した膣肉も収斂し、その拍子に埋め込まれていた何かがヌルリと頭をのぞかせた。

「ああっ！ ひい……い、いやあっ！」

それはピンク色の卵形バイブレーターだった。

慌てて力を入れてもどうにもならず、バイブは牝蜜の糸を引きながらポトリとシートの上に転がり、青年の目に晒されてしまった。

「な……これは……!？」

ブルブルと震え続ける淫具を見て、飯尾があんぐりと口を開ける。

「ああ……み、見ないで……飯尾君」

舌を噛みたくなるほどの羞恥に身を振る夏美。露出ビキニにローターバイブを装着した格好で、ビーチの端までいくというのが佐藤からの命令だったのだ。夏美は夫に会いたい一心で、ホテルのロビー、駐車場、そして海岸を恥辱に耐えて踏破してきたのだった。そこに飯尾が加わるとは思いもよらず、さすがの夏美も少女のように狼狽えるしかない。

「フフフ。いつも男に飢えて、オマ○コに何か入れておかないと気が済まない。そいつが倉木夏美の正体なんだ」

「ちがうの……こ、これには……わけが……」

何を言ってももう遅かった。佐藤の声が青年の獣性に火を点けたのか。慌ただしく勃起をつかみ出し、いよいよ挿入の体勢に入る。

「ハアッ……ハアッ……夏美さんが、そんないやらしい女だったなんて……」

初々しい勃起は亀頭の色もチェリーピンクだが、若いぶん勢いがある。性急な若者らしく鈴口からは驚くほど大量の先走り汁が湧き出し、ネットリ糸を引いては垂れ落ちていく。コチコチに硬くなった肉胴がピクピクと痙攣し今にも暴発しそうだ。普段の大人しそうな好青年からは想像もつかなかったが、やはり牡としての本能は抑えきれない。

「そんな……だめ……それだけは……」

夏美は青ざめた美貌を引きつらせた。これでは何のために三沢から逃げてきたのかわからない。しかも相手はよく知った青年なのだ。背徳感は今まで以上に大きい。それなのに本人の意思とは反対に身体のはうはほとんど抵抗を見せなかった。そこどころか青年に犯されるのを待ち望むかのように、媚粘膜がひくついて、愛液をトロトロと溢れさせてしまうのだ。

「夏美さんっ！」

体重を乗せて打ち下ろされた若い肉杭が、一気に憧れの人妻を貫いた。すでにバイブで蕩けてしまった粘蜜は、驚くほどスムーズに飯尾のモノを受け入れてしまう。

「あああああつ！」

深々と貫かれて夏美はおとがいを突き上げる。背徳感に背筋が鳥肌立ち、髪の毛が逆立ってしまう。

(あなた……ごめんなさい……また私は……いけないことを……)

悪夢から逃れ、もうすぐ夫に会えるという今になってまたしても不貞を働いてしまった事実には打ちのめされる。しかしそれはすぐに圧倒的な快感となって若妻の子宮中に燃え広がっていく。

「はあっはあっ！ 夏美さん！」

狂ったように腰を振られ、強烈なピストンが立て続けに撃ち込まれる。技巧も何もない稚拙な動きだが、若さと勢いが十分に補っている。そんながむしやらさが夏美にとつても新鮮で、年下の青年に犯されているという背徳感を燃え立たせるのだ。

「あっ……ンああっ……飯尾君……あひい……だ、だめ……こんなこと……ふああん！ こんなところでえ……ああああっ！」

ズンズンと突き上げられる子宮が燃えるように熱い。

(そんな……この子に……こんなに感じさせられるなんて……)

折り畳まれた太腿の筋肉が、しなやかなバネとなつて飯尾の律動を支えている。ピキニが引つかかつて完全に開脚できないため、膣道は狭まり擦れ合う粘膜の摩擦を強めていた。意識してやっているわけではないが、確実に快感を増幅させる要因だった。

それに加えて、眼前に広がる蒼天や肌を撫でていく爽やかな潮風などが、どこか現実感を乏しくさせ、人妻の貞操観念を麻痺させていく。それにつれて夏美の反応も次



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!